

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.175

April 2011

「銀行の銀行」を貫く連邦準備銀行

須 藤 功

金融恐慌が発生するたびに、とりわけ大手金融機関の救済が行われた場合には必ずといってよいほど、ウォール街と政府金融当局への批判が噴出する。ドキュメンタリー映画「インサイド・ジョブ」(2010 年)でも特集されているように、2008 年の金融危機も例外ではなかった。批判の矛先は投資銀行ゴールドマン・サックス出身のポールソン財務長官のみならず、金融機関の救済に奮闘した連邦準備銀行にも向けられた。その結果、連邦準備法の一部が改正され(ドッド・フランク金融制度改革法)、今後、連邦準備銀行総裁は各地区の「クラス B およびクラス C 取締役によって任命される」ことになった。この改正は何を意味し、どうしてこのような改正が必要であったのだろうか。連邦準備制度の歴史を簡単に振り返ってみることにしたい。

ところで、アメリカ大統領(2008 年の年俸 47.5 万ドル)に次ぐ連邦政府の高給取りには、連邦最高裁長官でも副大統領でも下院議長でもなく(同約 21 万ドル)、実は 12 の連邦準備銀行総裁らが並んでいる。ニューヨーク連銀総裁の年俸は大統領に次ぐ 39 万ドルで、この破格の俸給もしばしば批判の対象となってきた。また奇妙なことに、連邦準備制度理事会議長ベン・バーナンキの年俸は約 19 万ドルにすぎない。同じ中央銀行である日本銀行に例えてみれば、総裁の給与が支店長のそれを下回るようなものである。

なぜこのような給与体系なのかと言えば、連邦準備銀行が文字通り「銀行(家)の銀行」の途を歩んできたからである。「銀行の銀行」の意味は、一般的には(特に金融危機に際して)銀行にお金を貸す銀行、いわば「最後の貸し手」ということにある。これに加えてアメリカの場合には、「銀行が設立した銀行」という意味が加わる。つまり、12 の地区連邦準備銀行は加盟する民間銀行がその全株式を所有し、ワシントンの理事会の給与を

含め連邦準備制度全体の運営費は地区連銀の利益で賄う仕組みだからである。このため地区連銀は民間銀行の性格を強く残す一方、他方で連邦準備制度理事会はこれら地区連銀を監督し、金融政策を誘導する連邦政府機関の性格をもっている。こうして地区連銀のトップは当初から優れた銀行経営能力を持つことが期待され、報酬も民間銀行に準拠してきたが、理事会の報酬は連邦公務員のそれに準拠してきたのである。

ところが、各地区の連邦準備銀行には株主総会はない。代わりに株主たる加盟銀行は選挙で 9 名中 6 名の取締役を選出し、残りの 3 名は理事会が任命する。この取締役会が最高経営責任者たる総裁を任命して、地区連銀の運営全般を監視する役割を担っている。「銀行が設立した銀行」という仕組みは、1930 年代に大恐慌が起きたときにも批判の対象となった。しかし、この時には理事会の任命する取締役会議長を経営責任者から引きずり降ろして総裁に経営責任を集中させ、迅速な政策判断と地区連銀に対するワシントンの理事会によるコントロールを強化した。今次の制度改革では地区連銀に対するウォール街の影響力を抑えようと、加盟銀行が選出した 6 名の取締役のうち、加盟銀行代表の 3 名の取締役から総裁の任命権限を奪ったのである。

アメリカの連邦準備銀行は、世界でも稀にみる「最後の貸し手」機能を強化した中央銀行制度である。加盟銀行ではないベアスターンズやメリルリンチなどの投資銀行を、加盟銀行に吸収するなどして救済した。そして激しい批判にもかかわらず、上述の法改正にとどめた。私が滞在していた大学の金融史の大家は、連銀はもはや「最後の貸し手」機能を手放すべきだと力説していたが、今のところその意思はないように思える。

(明治大学)

東北関東大震災によせて

あまりに痛ましい被害です。犠牲となられた多くの方々のご冥福を祈り、また被災された本学会員の皆様には心からお見舞い申し上げます。

3月24日 日本アメリカ学会会長 紀平英作

『アメリカ研究』第46号原稿募集

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は、2012年3月に第46号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿を期待します。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文、もしくは進行中の研究ノート。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に連続して投稿することは出来ません。これは、なるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は33行×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で8ページ以内。ほかに英文レジュメ（500語）。執筆要項は、学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）を参照のこと。
3. 原稿締め切り期日 2011年9月6日（火）。学会事務局に必着のこと。
4. 提出部数 3部（コピー）。提出原稿は不採用の場合もお返し致しません。

応募者は、論文題目に簡単な説明を付けて、2011年6月末日までに電子メール（office@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。採否は編集委員会の責任において審査決定致します。

『アメリカ研究』第46号「特集論文」募集のお知らせ

会報174号にてお知らせしました通り、『アメリカ研究』第46号の特集テーマは、「海と国家」と決まりました。その趣旨は以下の通りです。

先般の米中首脳会談後の共同声明に、アメリカが「アジア太平洋国家」として地域安定に寄与することへの期待が盛り込まれたことは記憶に新しい。大陸国家であると同時に海洋国家でもあり続けたアメリカの相貌が、あらためて浮き彫りになった感がある。また昨年のメキシコ湾原油流出事件も、海洋の限界エネルギー利用とそのリスクという、環境と開発にかかわる新たな問題系に還元出来よう。時代を遡ってみれば、ナポレオン体制下での米英間の緊張に喚起された海防意識が、アルフレッド・マハンの言葉を引けば「合衆国の眼を海外に転じ」させて「大西洋国家」としてのアメリカの自己像を際立たせていったのがほぼ200年前、さらにもう200年ほど遡れば、ヴァージニア植民の開始という大航海時代の基点に立ち至る。西漸やフロンティア、さらには明白な宿命といった時代概念が織り上げてきたアメリカの姿は、第一義的には内陸国家のそれであった。アメリカを論じるに際して有用であったこの陸土という空間座標をあえて組み直して、海洋をアメリカ的経験のもうひとつの場として設けてみるならば、新しい視点からのアメリカ研究の可能性が見えてくるかもしれない。

文学領域からの一例を挙げれば、昨今、海洋文学ジャンル読み直しの試みが顕著なのは、海洋という空間がおのずからはらんでいる脱・境界性に、一国国民文学的な地政学境界を越え出していく批評契機を見出すところに発しているのだろう。また、今日までのアメリカの発展を考えるならば、移民らのほとんどは諸大陸から海洋を越えて新大陸へと至る移動の経験を有してきたのであるし、さらにアメリカの世界大国への道程は、「無料の安全保障」の恩恵をもたらす「境界」としての海洋の概念を翻すことに発し、いかに海洋を制しいかに海洋を越えて影響力を行使するかのプロセスとして展開してきた。そしてこの研究領域においてもまた、海洋は「脱・境界性」の象徴となり、一国史的な外交史から国際関係史としてのマルチ・ナショナルなアプローチが求められるようになっている。このような問題関心から、「海と国家」のテーマを立てて特集企画とさせて頂く。意欲的なアメリカ研究論考を期待したい。

「特集」に執筆希望の会員は、2011年6月末日までに、氏名・所属、論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。その際のSubjectは、「『アメリカ研究』特集応募」と明記してくださるようお願いいたします。原稿については、学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）上の執筆要項をご覧ください。締め切りは、9月6日（火）必着です。

第 46 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第 46 回年次大会は、2012 年 6 月 2 日（土）、3 日（日）〔予定〕に、名古屋大学で開催されます。企画提案やご報告希望を下記の通り募集いたしますので、会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。部会につきましても、一般会員からのご提案に基づいて企画されますので、よろしく願いいたします。なお、すべての応募は事務局<office@jaas.gr.jp>宛に、1～3 のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」
自由論題の締め切りは 11 月 20 日になります。詳細については会報 7 月号（7 月末日発行予定）でお知らせします。
2. 「部会の企画提案」（締切日：8 月 31 日）
部会のテーマおよび 800 字程度の要旨。報告者案があれば合わせてお願いします。部会の企画に関しては、以下のような申し合わせ事項がございますので、ご留意ください。第 44・45 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第 46 回大会の部会では報告できません。司会者、討論者として応募されることも、原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。また、司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。学際性を重視し、バランスの取れた登壇者の構成となるよう配慮してください。会員以外の部会登壇者に対して、謝金、交通費などが学会からは支払われませんので、ご了解ください。
3. 「分科会開催申し込み」（締切日：8 月 31 日）
新規の場合は、分科会趣旨（400 字以内）、分科会連絡責任者氏名および賛同者 5 名の氏名。継続の分科会も、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨お知らせください。
なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会プログラム委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2011 年度の OAH/JAAS Short Residency Program による派遣研究者が次の 2 名に決まりました。このプログラムはアメリカ史を中心に、日本の大学院生、学部生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので、研究者は各大学に約 2 週間滞在します。研究者の専門領域、受け入れ校と担当者、滞在期間は以下の通りです。これらの研究者を招いて講演会や研究会を開催するご希望のある方は、できるだけ早い時期に受け入れ校の担当者と直接交渉し、この機会を有効にご利用下さい。

Catherine Ceniza Choy (University of California, Berkeley)

専門領域：history of race and gender

受け入れ校/担当者：一橋大学/貴堂嘉之会員 (Y.KIDO@srv.cc.hit-u.ac.jp)

滞在期間：2011 年 6 月 1 日から 15 日まで

Deborah Dash Moore (University of Michigan)

専門領域：American Jewish history

受け入れ校/担当者：北九州市立大学/北美幸会員 (miyukik@kitakyu-u.ac.jp)

滞在期間：2011 年 5 月下旬から約 2 週間

なお、このプログラムが 2012 年度も実施される場合、受け入れ校となることを希望される会員は 2011 年 5 月 20 日までに事務局 (office@jaas.gr.jp) までご連絡ください。

国際委員会

2011 年 OAH 年次大会のためのアメリカ大使館賞受賞者 および日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について

2011 年 3 月にテキサス州ヒューストンで開催される OAH 年次大会を対象とするアメリカ大使館賞の受賞者は伊藤孝治会員（大阪大学大学院博士課程）に決まりました。

また、米国留学中の大学院生会員を対象とする旅費・滞在費補助金の受給者は以下の 4 名に決まりました。

小田悠生会員（コロンビア大学）

河原大輔会員（ロチェスター大学）

戸田山祐会員（ジョージ・ワシントン大学）

中村信之会員（南カリフォルニア大学）

おめでとうございます。

国際委員会

亀井俊介 監修

『マーク・トウェイン文学／文化事典』

(彩流社, 2010 年, 5,145 円)

世界的文豪をめぐる作家事典のたぐいは数多い。それらの邦訳が刊行されることも少なくない。にもかかわらず、本家本元では言語的制約上決して克服しえない限界が存在するため、このところ日本オリジナル企画が相次いでいる。だが、いざ日本オリジナルの作家事典を編纂しようとするれば、そもそも日本語圏で外国文学を研究するとはいかなる営為なのかという、あまりにも本質的な問題に突き当たる。複数の邦訳をもち、それぞれがそれなりに親しまれた名作などは、まずはタイトルの変遷史と訳題の固定だけでも、広くて深い学識を要求する。故に、こうした企ての実現は必ずしも容易なものではない。

しかし、幾多の困難を乗り越えて、最近では日本ウィリアム・フォークナー協会が総力を結集し、北米版の誤認を修正しつつ最新情報を盛り込んで世界的高水準を行く、全 850 ページにも及ぶ『フォークナー事典』(松柏社, 2008 年)を出した。続く本書は、我が国を代表するアメリカ文学者にして比較文学者、トウェイン研究の大御所にして、日本マーク・トウェイン協会会長も務めた亀井俊介の徹底監修から成る、全 500 ページ近い作家没後 100 年記念出版である。

本書最大の特色は、全体を「マーク・トウェインの生涯」(井川眞砂)、「マーク・トウェインの著作」(後藤和彦・序文)、「マーク・トウェインの文学世界」(有馬容子・序文)、「マーク・トウェインのアメリカ」(武田貴子・序文)、「マーク・トウェインと世界」(里内克己・序文)、「日本におけるマーク・トウェイン」(石原剛・序文)、「現代アメリカ文学から見たマーク・トウェイン」(柴田元幸)の七部構成を採っている点だ。第一部と第七部を井川、柴田がそれぞれ単独執筆しているほかは、各セクションは序文担当者が実質的な編者となった分担執筆である。本書が「日本人」のための「読む事典」を謳うからには、その中核は第三部から第六部の部分に潜むと見てよい。はたして「マーク・トウェインの文学世界」では聖書や中世趣味、ロマンスやリアリズム、パルプやパロディといった主流文学的項目はもちろん、作家が大いに貢献した文学サブジャンルの SF や探偵小説、ファンタジーなどにまで注意が払われる。また「マーク・トウェインのアメリカ」という巨大なトピックが掲げられたセクションは作家ゆかりの人名や地名、新聞雑誌名がぎっしり詰まって有益だ。さらに「マーク・トウェインと世界」では作家が旅した世界各国へどのようなスタンスを保ったか、とりわけアメリカが帝国化していく世紀転換期にいかなる外国人観を抱いていたかが解説される。そして本書の根幹のひとつとも言うべき「日本におけるマーク・トウェイン」では、翻訳にはじまる受容史からアニメなどの映像化までが克明に語られる。事典という書名ではあるものの、これは昨今の欧米で隆盛をきわめる“Readers' Guide”や“Companion”とも重なる長所をもつ、絶好の再入門書とも呼べるだろう。

巽 孝之(慶應義塾大学)

塚田幸光 著

『シネマとジェンダー——アメリカ映画の性と戦争』

(臨川書店, 2010 年, 2,730 円)

本書は、映画に潜む政治性をめぐる考察である。より具体的には、アメリカ映画における「性」と「戦争」の交錯するポリティクスを凝視し、「映画が隠蔽／開示する欲望」を見極めようとする生産的な試みである。分析対象として、筆者は第二次世界大戦、ヴェトナム戦争、湾岸戦争期につくられた「誰もが一度は見たことのある映画」をあえて選択し、その一群の映画が織りなす複雑な表象体系を明るみに出す。そしてその政治的、産業的、社会的、文化的コンテクストとの交差を論じている。

五つの章から構成された本書は、まずは『レベッカ』に焦点を当て、既存の「女性映画」から逸脱した多面的な女性性の表象、またレベッカという「謎の女性」の優越的な視座の確立を鋭く指摘する。続いて真珠湾後の戦争映画(とりわけ『カサブランカ』と『脱出』)におけるジェンダー表象の差異、フィルム・ノワール(『ローラ殺人事件』と『深夜の告白』)の強固な父権性、そして『サンセット大通り』で逆転する男女の力学が指摘される。ヴェトナム戦争期に関しては、エロス化された銃撃戦の中で炸裂する『ワイルドバンチ』のマスキュリティや、身体への拷問や「虐待」を経て「被害者化」されるジョン・ランボーというアメリカン・シンボルの形成が克明にされる。湾岸戦争期の議論では『羊たちの沈黙』が俎上に載り、「怪物化」された同性愛的な猟奇殺人者を追跡する「兵士化」された FBI 女性捜査官をめぐるジェンダーとセクシュアリティの倒錯が論じられる。

執筆にあたり、筆者は取り扱う映画を厳選し、個々の作品の「精読」に労力を費やしている。このおかげで、本書はミザンセンの記号分析にとどまらず、フレーミング、フラッシュバック、ヴォイスオーバー、切り返しなどといった個々の技法が、緊迫したジェンダー表象の形成に寄与する様を明快に描き出している。また、1940 年代から 1990 年代までの幅広い時間枠の中から適宜に作品を選んでいため、時代を経たジェンダーの価値体系の変遷が効果的に示されている。

しかし同時に、扱われる一連の映画群の政治的、文化的、社会的コンテクストとの関連については疑問が残る。例えば、真珠湾攻撃の約 20 ヶ月前に封切られた『レベッカ』を、果たしてどこまで「ハリウッド戦時体制」下の作品とみなせるのだろうか。さらに、いくつもの戦争下で変質・多義化するアメリカのジェンダー表象は、サイードやマックリントックが分析したヨーロッパの帝国主義下の営為と類似したものなのだろうか。

以上の疑問は、本書の価値を損なうものではなく、むしろそれがいかに刺激的であるかを示唆している。本書は有益な仕事であり、映画学、アメリカ学、ジェンダー学の諸分野に収穫をもたらしている。

北村 洋(ウィリアム・アンド・メアリー大学)

天野 元 著
『ゴールドラッシュの恋人たち——西部開拓年
代誌 1』

(編集工房ノア, 2010 年, 4,800 円)

本書はカリフォルニアのゴールドラッシュを中心とした西部開拓史であって、985 頁にのぼる大長編である。酒場で、偶然隣り合わせに座った人から、いつ尽きるとも知れない昔話を聞かされるという趣があり、そう簡単には読み終われない。ゴールドラッシュを中心とするとはいえ、話はコロンブスから始まり、ヴァージニア植民地、プリマス植民地、セイラムの魔女裁判、フィラデルフィアの居酒屋、アメリカの独立、ジェファソン大統領の子ども、メキシコの独立、カリフォルニアへのアメリカ人の移住、ラーキン領事、そして、何故かソローの日記が紹介されるという具合にある。盛り沢山である。

以上が第 1 章で、155 ページから始まる第 2 章で、カリフォルニアの開拓とマーシャルによる金発見、第 3 章でサンフランシスコが語られることになる。読み進めていて気になることは、本書が、コロンブスの発見に始まる白人中心の西部開拓史という昔ながらの見方にほぼ立っている点である。先住民たるインディアンが出てこない訳ではないが、もう少し現代の研究状況に合わせた視角が取り入れられてもよかった。また、註が一切ないことは、読者へのサービスともいえるが、これでは、著者のいう「食材」が、日本産なのか中国産なのかわからなくて不安である。

第 4 章は、ゴールドラッシュのカリフォルニアへ行った青年と、ペンシルヴァニアに残った婚約者のとりかわした書簡を紹介した章で、最も興味深い。著者は自身を「料理人」としているが、実は、この章では食材がそのまま、料理も味つけもされずに提供されていて、それが新鮮な野菜サラダを食べているようで非常に美味である。しかし、この材料を使って、娘のいる東部社会と、青年のいる西部との比較がなされていたら、もっと味わいが増したことであろう。

さて、本書はいわば叙述に徹していて、分析はされていない。とはいえ、ゴールドラッシュについて、それが単なる個人的経験ではなく、「アメリカ全体をおおったアメリカ的現象」であったと、歴史的重要性を強調している。この点を証明するためには、やはり何らかの分析が必要であったと思われる。確かにゴールドラッシュは、それに参加した者にとってのみならず、アメリカ全体にとって、成人に達するための通過儀式であったと見ることも可能である。しかし、若い二人の手紙から、何を読みとるべきかという作業が、すべて読者にまかされている点に不満が残る。

第 5 章は用語解説と索引ということで「ディナーのデザートにあたる」と著者も書いているが、むしろ、さらに註をつけない以上、参考文献が重要となろう。しかし、これは著者のアルファベット順に書名が並んでいるだけで、概説書か研究書かわからなかったのが残念である。

岡田泰男 (慶応義塾大学)

~~~~~  
**2011 年度 第 5 回名古屋アメリカ研究夏期セミナー (NASSS 2007-2011) 参加のお勧め**

南山大学において第 5 回名古屋アメリカ研究夏期セミナー (NASSS) を 2011 年 7 月 23 日 (土)~7 月 26 日 (火)、4 日間の日程で開催いたします。

I. 2011 年年度次テーマ:「グローバル化とアメリカ研究の行方」(“American Studies in the Global Age”)

部門:【政治・国際関係】部門、【歴史・社会】部門、【文学・文化】部門

基調講演者・米国人特別講師:

【政治・国際関係】部門 — Dr. Jeremi Suri (University of Wisconsin-Madison)

【歴史・社会】部門 — Dr. Paul A. Kramer (Vanderbilt University)

【文学・文化】部門 — Dr. Anita Patterson (Boston University)

II. 日程:

専門家会議 (会場: 南山大学名古屋キャンパス)

7 月 23 日 (土) 全体会: 3 名の米国人招聘研究者による基調講演と日本人コメンテーターの論評をふまえた全体討論 (同時通訳付)

7 月 24 日 (日) 部門別会議: 3 部門に分かれ、それぞれの会場で若手日本人研究者による報告をもとにした討論  
国際大学院生セミナー (会場: 南山学園研修センター)

7 月 25 日 (月) 全体会: ワークショップ「研究者として成功するためには」、参加院生による自己紹介など

7 月 26 日 (火) 部門別セミナー: 3 部門に分かれての大学院生による研究発表

\*セミナーは専門家会議・全体会を除き、すべて英語で行われます。

III. 参加条件:

【専門家会議】大学教員・研究者、中学、高校教員であること

【国際大学院生セミナー】①原則として修士課程 2 年次以上の大学院生であること②7/23 の夜から 4 泊 5 日で南山学園研修センターにて宿泊可能であること③専門家会議への参加が可能であること

参加ご希望の方は、下記の南山大学アメリカ研究センター web サイトにて申込書類をダウンロードし、NASSS 事務局までご返信ください (締め切り: 5 月 10 日)。なお、国際大学院生セミナーの応募締め切りは 3 月末ですが、応募状況により延長の可能性もございます。詳しくは web サイトをご覧ください。

南山大学アメリカ研究センター NASSS 事務局

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18 TEL: 052-832-3111 (内線: 3426) FAX: 052-832-6825

Mail: nasss-jimu@nanzan-u.ac.jp

Web: <http://www.nanzan-u.ac.jp/AMERICA/index.html>

## アメリカ学会第 45 回年次大会プログラム

1. 月 日 2011 年 6 月 4 日 (土) 6 月 5 日 (日)
2. 場 所 東京大学駒場キャンパス  
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1  
会場校連絡先 遠藤泰生 (電話: 03-5454-6308 E-mail: endou@ask.c.u-tokyo.ac.jp)
3. 受 付 6 月 4 日 13 号館 1 階吹き抜け 6 月 5 日 1 号館 1 階 112 教室
4. プログラム (詳細は大会当日に受付で配布する「大会要項」に明記します。)

### 第 1 日 6 月 4 日 (土曜日)

#### 自由論題

第 1 報告 (9:30~10:05) 第 2 報告 (10:10~10:45) 第 3 報告 (10:50~11:25) 第 4 報告 (11:30~12:05)

#### 自由論題 A [13 号館 1 階 1311 教室] 司会 高尾直知 (中央大学)

- |                  |                                                                 |
|------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 白川 恵子 (同志社大学)    | 「市民的不服従・修辭的権威—— <i>Memoirs of Stephen Burroughs</i> (1798) を読む」 |
| 小島 尚人 (東京大学 (院)) | 「アメリカ作家の自己形成——ヘンリー・ジェイムズのヨーロッパ旅行 1869-70/1872-74」               |
| 高木ゆかり (神戸大学 (院)) | 「 <i>I Love Lucy</i> における「変換行為」としてのギャグ——グレマスの「欲望の関係」からの考察」      |
| 川村 亜樹 (愛知大学)     | 「亡霊たちがもたらす危うい生——Don DeLillo 小説における自己充足的空間の瓦解」                   |

#### 自由論題 B [13 号館 1 階 1312 教室] 司会 廣部泉 (明治大学)

- |                                                     |                                                                                                |
|-----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 北原 妙子 (東洋大学)                                        | 「共和国のためのアート——彫刻家クロフォードと詩人ロングフェロー」                                                              |
| 今野 裕子 (南カリフォルニア大学 (院))                              | 「トランスパシフィック・ローカリズム——20 世紀初頭のカリフォルニア州・ターミナル島日系人にとっての故郷とは」                                       |
| 大八木豪 (南カリフォルニア大学 (院))                               | 「1960 年代-70 年代のアジア系アメリカ人の国際主義」                                                                 |
| Joan S. H. Wang (National Taiwan Normal University) | 「The Development of Anti-Japanese Sentiment among the Chinese in the American West, 1885-1937」 |

#### 自由論題 C [13 号館 2 階 1321 教室] 司会 村田勝幸 (北海道大学)

- |                  |                                                                 |
|------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 長谷川詩織 (筑波大学 (院)) | 「映画産業における「アメリカ」の発見——1910 年代の対ラテン・アメリカ政策から見る「先住民映画」の流行」          |
| 小倉 恵実 (京都産業大学)   | 「アメリカ両大戦間期における科学言説としての優生学理論の展開」                                 |
| 杉野 俊子 (工学院大学)    | 「言語・教育政策に見られる人種間格差——アメリカとブラジルの黒人貧困層の比較」                         |
| 吉岡 宏祐 (徳島大学)     | 「現代アメリカ合衆国におけるアフーマティブ・アクション論争分析——経済界と高等教育機関による「多様性」の「相互構築」を中心に」 |

#### 自由論題 D [13 号館 2 階 1322 教室] 司会 井口治夫 (名古屋大学)

- |                              |                                                           |
|------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 久保浩樹 (京都大学 (院))              | 「リアリストは冷戦期のアメリカ政治をどう見ていたのか?——モーゲンソーとウォルツにおける「民主主義と外交」」    |
| 松本明日香 (筑波大学 (院))             | 「公開討論会と外交機密——1960 年第 4 回, 1976 年第 2 回米国大統領候補者テレビ討論会の対照比較」 |
| 佐藤真千子 (静岡県立大学)               | 「人権外交の展開におけるフリーダム・ハウスの役割——カーター政権を中心に」                     |
| 佐原 彩子 (カリフォルニア大学サンディエゴ校 (院)) | 「日米インドシナ難民政策にみる人種化された難民像」                                 |

#### 自由論題 E [13 号館 3 階 1331 教室] 司会 阿部小涼 (琉球大学)

- |                   |                                                              |
|-------------------|--------------------------------------------------------------|
| 徳田 勝一 (東京大学 (院))  | 「南北戦争時の大量死と世紀転換期の「南北和解」——軍人の記憶が「南北和解」に果たした役割を中心に」            |
| 深松 亮太 (法政大学 (院))  | 「ポピュリスト運動と帝国主義論争——植民地住民のシティズンシップを巡る議論と人種」                    |
| 大岩根安里 (同志社大学 (院)) | 「イスラエル建国以前のアメリカ・シオニズムの多義性——H・ソルドと L・D・ブランダイスに見られるパレスティナ観の比較」 |
| 上 英明 (東京大学 (院))   | 「米国におけるヒスパニックの政治的台頭——フロリダのキューバ系勢力を事例に (1980-2010)」           |

昼食休憩（12：05～13：20）

理事・評議員会（12：10～13：10） [1号館1階109教室]

総会（13：20～13：50） [13号館2階1323教室]

会長講演（14：00～14：50） [13号館2階1323教室]

司会 紀平英作（帝京大学）

Ruth Wilson Gilmore, President of ASA (The Graduate Center, City University of New York)

“Explaining the US Addiction to Prisons: Race, Gender, Sexuality, and Crisis”

清水博賞授与式（14：55～15：05） [13号館2階1323教室]

シンポジウム（15：10～17：40） [13号館2階1323教室]

「反知性主義再考」

司会 久保文明（東京大学）

報告者 前川玲子（京都大学）

「ホーフスタッターの『アメリカにおける反知性主義』——その知的起源と政治的背景」

後藤和彦（立教大学）

「W・J・キャッシュと志賀直哉——「野蛮な理想」と「原始的な慾情」

森本あんり（国際基督教大学）

「エリート大学根性をぶっとばせ——反知性主義の伝統と20世紀リヴァイヴァリズム」

会田弘継（共同通信編集委員室長）「反近代の心性と反知性主義」

懇親会（18：00～20：00） [駒場コミュニケーションプラザ南館（生協食堂）2階]

\*\*\*\*\*

第2日 6月5日（日曜日）

部会A 「南北戦争150周年——巨大内戦の意味を問う」 [1号館2階164教室]（9：30～12：00）

司会 横山良（甲南大）

報告者 加藤（磯野）順子（日本大学（講））「テネシーに於ける奴隷解放について」

小原豊志（東北大学）

「南北戦争・再建と黒人選挙権——選挙権における白人性解体の意義と限界——」

西出敬一（徳島大学名誉教授）「間大西洋の奴隷制廃止における南北戦争」

コメント 田中きく代（関西学院大学）

部会B 「連続企画 アメリカの教え方（現状認識）」 [1号館2階159教室]（9：30～12：00）

司会 油井大三郎（東京女子大学）

報告者 松原宏之（横浜国立大学）

「アメリカを＜誰＞と＜どこ＞で学びあうのか——横浜国立大学グローバルスタディツアーの事例から」

和泉真澄（同志社大学）

「文化ポリティクスとの付き合い方：グローバル・シティズンシップ教育とアメリカ研究」

尾崎俊介（愛知教育大学）

「予備知識なき学生へのアメリカ文化の教え方——私の試行錯誤」

Workshop A [Building 1 2nd Fl. Room 166]（9：30～12：00）

“Change in Cultural Production”

Chair: Reiichi Miura (Hitotsubashi University)

Panelists: Sylvia Chong (University of Virginia)

“Commodifying Our Bodies, Our Culture: Asian American Cultural Labor in the Cold War Era”

Yoshiko Uzawa (Keio University)

“Hashimura Togo's Race Wars: Yellowface, the Yellow Peril, and Cosmopolitan Demesticity in Early Twentieth Century America”

Seung-bok Yi (Soongsil University)

“Reinforced Western Viewpoint in a Vietnamese Woman's Story: Oliver Stone's Film *Heaven and Earth*”

Commentator: Ruth Wilson Gilmore, ASA President

(The Graduate Center, City University of New York)

**分科会** (12:10~13:30) および昼食 (分科会の内容については、以下を参照) [1号館1階各教室]

**部会 C 「ゼロ年代のアメリカ文化」** [1号館2階158教室] (13:40~16:10)

司会・コメント 都甲幸治 (早稲田大学)

報告者 大和田俊之 (慶應大学) 「ジェイ Z, BK, そして MP3——ゼロ年代の音楽」  
小澤英実 (東京学芸大学) 「隠喩としてのゾンビ——アメリカの/という怪物表象をめぐる」  
異孝之 (慶應大学) 「見えないアジア, 別の日本」  
吉本光宏 (早稲田大学) 「映画と熱狂」

**部会 D 「中間選挙後の内政と外交」** [1号館2階159教室] (13:40~16:10)

司会・コメント 村田晃嗣 (同志社大学)

報告者 渡辺将人 (北海道大学) 「オバマの内政と支持層: 大統領選挙に向けて」  
阪田恭代 (神田外国語大学) 「オバマ政権と米韓関係」  
伊藤剛 (明治大学) 「「勢力均衡」か, 「覇権」か? ——対中関係安定のための基本方針」

**部会 E 「環境と現代アメリカ」** [1号館2階164教室] (13:40~16:10)

司会 小塩和人 (上智大学)

報告者 原口弥生 (茨城大学) 「メキシコ湾原油流出事故にみるアメリカ環境政治——史上最悪の事故による最小限の政策的影響?」  
石山徳子 (明治大学) 「原生自然の空間構築と人種——デス・バレー国立公園を事例に」  
亀山康子 (国立環境研究所) 「米国と気候変動」  
杉野綾子 (日本エネルギー研究所) 「環境規制とエネルギー供給」

**Workshop B** [Building 1 2nd Fl. Room 166] (13:40~16:10)

“Change in the Global (Glocal) Context: Spaces of Change”

Chair: Hayumi Higuchi (Senshu University)

Panelists: Moon-Ho Jung (University of Washington) “Repressing Anarchism: Race, State Violence, and the U.S. Empire Across the Pacific”  
Ichiro Miyata (Saitama University) “Pacific Transit and Its Role in Changing Atlanta from ‘the Capital of the New South’ to the ‘International’ City, 1965-1971”  
Taro Futamura (Doshisha University) “Local Food Movement and Beyond: Envisioning the Changing Role of Food and Agriculture in the American Society”

Commentator: Haesung Hwang, ASAK President (Hansung University)

5. 1) 懇親会は事前の申し込みが必要です。懇親会費 6,000 円は同封の払込用紙にて 5 月 9 日 (月) までにご納入下さい (期日厳守)。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返しできませんので、ご注意ください。  
2) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。  
3) 非会員の大会参加費は 1,000 円です。会場受付にてお支払いください。
6. 昼食: 大学構内で飲食できるのは、駒場コミュニケーションプラザ南館 (生協食堂) 1 階、ルヴェ・ソン・ヴェール (ファカルティ・ハウス)、イタリアントマトです。4 日 (土) はその全てが営業していますが、5 日 (日) は生協食堂が閉まります。ルヴェ・ソン・ヴェール、イタリアントマト、大学周辺の飲食店を利用されるか、各自お弁当をご用意ください。大学周辺の飲食店は、大会受付で配布するランチマップに記載いたします。



## 会場案内

|            |                          |                    |
|------------|--------------------------|--------------------|
| 受付         | 6月4日(土) 13号館1階吹き抜け       | 6月5日(日) 1号館1階112教室 |
| 本部・スタッフ控え室 | 6月4日(土) 5日(日) 1号館1階112教室 |                    |
| 一般控え室      | 6月4日(土) 5日(日) 1号館1階113教室 |                    |
| 書店等の出展     | 6月4日(土) 13号館1階吹き抜け       | 6月5日(日) 1号館1階108教室 |

## 6月4日(土)

|     |                          |              |
|-----|--------------------------|--------------|
| 午前  | 自由論題                     | 13号館1～3階各教室  |
| 昼食時 | 理事・評議員会                  | 1号館1階109教室   |
| 総会  |                          | 13号館2階1323教室 |
| 午後  | 会長講演・シンポジウム              | 13号館2階1323教室 |
| 懇親会 | 駒場コミュニケーションプラザ南館(生協食堂)2階 |              |

## 6月5日(日)

|     |             |           |
|-----|-------------|-----------|
| 午前  | 部会及びワークショップ | 13号館2階各教室 |
| 昼食時 | 分科会         | 1号館1階各教室  |
| 午後  | 部会及びワークショップ | 13号館2階各教室 |

## 第45回年次大会 分科会(12:10～13:30)のご案内

( ) は責任者および連絡先。会場はすべて1号館1階の教室です。

### 1. アメリカ政治(平体由美(札幌学院大学) pxc02740@nifty.com) 102 教室

テーマ: 統合と表象——他者の視点の再認識

報告: 藤村好美(群馬県立女子大学)「アメリカにおける「シティ・カウンティ統合」と都市政治の改革——ケンタッキー州ルイビル事例をもとに——」

金澤宏明(明治大学兼任講師)「19世紀末アメリカにおける政治カートゥーンの表象——キューバ問題を中心に——」

アメリカ政治研究のフィールドや分析視角は多岐にわたっている。のみならず、他分野の影響を受けて年々新しいアプローチが登場する。その豊かさは瞠目すべきである。しかしながら、アメリカにおけるアメリカ政治研究をフォローする努力の一方で、アメリカ外部の者が持つ文化性や他者性を意識した研究は、次第に減少している印象がぬぐえない。本分科会では、日本における自治体合併構想を一つの鏡としてアメリカのカウンティ統合を考察すること、日本におけるマンガ表象の方法論をアメリカの政治カートゥーンに適用することについて試みる。政治研究という枠組みを共有しながらも、外国人だからこそ見える問題、取りうる方法の価値を再考するきっかけとしたい。

### 2. 冷戦史研究(松田武(大阪大学) matsudad@ninus.ocn.ne.jp) 103 教室

テーマ: ドイツ再統一とアメリカ外交

報告: 森 聡(法政大学)

1989年11月9日にベルリンの壁が崩壊し、H・コール西ドイツ首相が同28日の議会演説でドイツ再統一に向けての方針を「十ヶ条」にまとめて発表した。英仏ソはドイツ再統一に対して強い警戒心を抱くが、1990年9月12日のいわゆる「2+4」会議では、ドイツ再統一に関する基本合意に達した。本報告では、アメリカがドイツ再統一の推進において、いかにして英仏ソの反対を乗り越えたのか、そしてそれはなぜ可能となったのか、先行研究も批判的に検討しながら解明を試みたい。より具体的には、西欧諸国に対する安心供与(統一ドイツのNATOへの編入)と、ソ連に対する安心供与(統一ドイツがソ連の安全保障上の利益を害さないような仕組み)との間には対立が生じていたが、アメリカ(と西ドイツ)の外交が、いかにこれを克服したのかを明らかにしてみたい。

### 3. 日米関係(浅野一弘(札幌大学) k-asano@sapporo-u.ac.jp) 115 教室

テーマ: アメリカの選挙報道にみる日米関係——日米比較の観点から——

報告: 前嶋和弘(文教大学)

本報告では2010年の選挙(7月の参議院選と11月の中間選挙)を含め、過去25年間の日米両国の選挙における重要争点の推移を分析し、日米関係がどのように変化してきたのかを検証する。具体的には、各種世論調査とともに、有力紙の内容分析を行い、包括的に分析する。90年代半ばまでの「ジャパンバッシング」の時代においては、アメリカの選挙では「日本問題」は大きな争点だったが、近年、日本が選挙の争点に浮上することは極めてまれになっている。これは日米関係が良好であることを示しているものの、中国の経済的台頭もあって日本のプレゼンスが小さくなっている点も否定できない。一方、日本の場合、7月の参議院選における普天間問題のように、アメリカ関連の政策が頻繁に

争点化し続けているのはいうまでもない。本報告では、選挙というプリズムを通じて、この日米間の大きなねじれも明らかにしたい。

#### 4. 経済・経済史（名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp）116 教室

テーマ：航空宇宙からソフトウェアへ——「創造型企業都市」シアトルの軌跡——

報告：山縣宏之（立教大学）

本報告は、アメリカでも産業構成の「多様化」に成功してきた都市の一つと考えられる太平洋岸北西地域の産業都市シアトルの戦後産業発展プロセスを追跡する。1960年代から1980年代にかけてのシアトルは、航空宇宙産業都市として発展した。そこで第一に、航空宇宙産業都市のしくみを、ボーイング社を基軸とした企業都市の成り立ちに注目して検討する。加えてシアトルは1980年代以降、経済構造が著しくサービス化・ソフト化し、なかでもソフトウェア産業を中心とするハイテク産業が存在感を増した。従って第二に、シアトルでソフトウェア産業が成長した要因を、巨大企業マイクロソフト社と多様なソフトウェア企業の成長発展プロセスの検討を通じて浮き彫りにする。このように新しい企業を生み出す「創造型企業都市」のしくみと産業構成の多様化プロセスの検討を通じて、現代アメリカ産業都市が変化し続けるのはなぜか、有益な知見を引き出してみたい。

#### 5. アジア系アメリカ研究（野崎京子（京都産業大学）nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp）117 教室

テーマ：日系ペルー人強制収容経験の社会学的研究——ライフストーリーからみる「集い」のかたち

報告：仲田周子（日本女子大学（院））

第二次大戦中、ペルーからアメリカ合衆国へ強制収容された約1800人の日系ペルー人は、戦後、ペルーへの再入国を許されたわずかな人びとをのぞき、日本、アメリカへと離散することとなった。1980年代、テキサス州クリスタル・シティ収容所への強制収容を経験した日系ペルー人を中心にして「ペルー会」が開催され、現在まで継続的に集まりが持たれるようになった。強制収容という過去の記憶を軸に離散した人びとを結びつけるペルー会は、参加する個々のアイデンティティや家族の歴史、あるいは強制収容以降の生活経験など多様なライフが交錯する空間でもある。本報告では、ペルー会に集う人びとのライフストーリーから、強制収容経験がどのように意味づけられ、またそれら個々の経験に対して、ペルー会という集いがどのように位置づけられるのかをみていく。日系ペルー人強制収容経験について、社会学的な立場からその現在の意味を考えたい。

#### 6. アメリカ女性史・ジェンダー研究（兼子歩（長野県短期大学）kaneko@nagano-kentan.ac.jp）118 教室

テーマ：同性婚と「家族の価値」——合衆国文化戦争の側面

報告：小泉明子（京都大学（院））

アメリカ合衆国では1990年以降、同性婚の承認が大統領選の争点になるなど世論を二分するイシューとなってきた。同性婚問題は合衆国においては文化的価値観をめぐる対立（文化戦争：Culture War）の一つとして認識されている。婚姻する権利の平等を求める同性愛者の権利運動と、それに反対する宗教右派（Christian Rights）の対立は、合衆国の政策、立法に対し様々な影響を及ぼしている。宗教右派は1970年代末に「家族の価値 Family Values」という伝統的婚姻保護の主張を掲げて反同性愛運動（counter movements）を開始するが、1990年代以降には自らの政策アジェンダを実現させるために共和党と接近していく。本報告は、同性婚をめぐる同性愛者の権利運動と宗教右派の反対運動が生じさせるダイナミズムを通して、合衆国で家族、婚姻がどのようなものとしてとらえられているのかにつき、考察する。

#### 7. アメリカ先住民研究（佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otsuma.ac.jp）119 教室

テーマ：インディアン部族——その法的意味

報告：藤田尚則（創価大学（院））

アメリカ先住民のグループが、「インディアン部族」であると連邦によって正式に承認されることは、当該グループが、連邦政府と政府対政府の関係に立つことを意味する。部族であることの連邦による積極的承認は、部族が独立した固有の主権的権限を有することをも意味する。承認によって部族は、主権免除をもち、自らのテリトリーに対する管轄権を行使し、部族裁判所を設立することができる。また、「インディアン自決及び教育援助法」に基づいて補助金を管理し、「インディアン賭博規制法」に従って賭博場を設置し、「インディアン交易及び通商法」によって土地請求を提起し得る。更に部族は、条約に基づく狩猟権及び漁業権を行使し、その他の連邦法上のさまざまな役務を取得し得るのである。

本報告は、連邦による部族の承認の手続きとその意義、連邦法の適用、管理終結された部族の権利回復等の問題について、判例の展開を念頭に、論究することを目的とする。

#### 8. 初期アメリカ（橋川健竜（東京大学）kenryu@ask.c.u-tokyo.ac.jp）120 教室

テーマ：海と船から見る初期アメリカ世界

報告：薩摩真介（早稲田大学（非））「大西洋世界の中の財政軍事国家ブリテン——十八世紀初頭のブリテン領カリブ海植民地における私掠奨励政策と海軍水夫供給問題（仮）」

笠井俊和（名古屋大学（院））「反抗的な船乗り・従順な船乗り——近世大西洋世界における船の上の小社会（仮）」

近年、ブリテン史とアメリカ史の双方で、大西洋世界を視野に入れた 17・18 世紀研究がさかに行われている。中でも海に直接かわかる海事史は、一国史のかなたにある近世史像をさまざまに実感させてくれる、魅力ある分野である。本分科会では、近世海事史の先端的な報告 2 本をつうじて、18 世紀の大西洋世界における初期アメリカの位置を考える。ブリテン領アメリカ植民地で活発に活動していた私掠船の乗組員を、ブリテン海軍が強制的に徴募することを禁止する「アメリカ法」が 1708 年に本国で成立する過程の検討と、1720 年代にボストン副海事裁判所で扱われた訴訟と船舶の出入港記録から、当時の船乗りが船上生活の何に不満を感じていたかを描き出す分析により、植民地社会と船乗りの関係、変転しつつあった帝国の構造と政治、ジャマイカ植民地をはじめとするカリブ海地域とのつながりなど、13 植民地を越える近世世界の広がりや深みを探ってみたい。

#### 9. 文化・芸術史（小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp）121 教室

テーマ：アメリカ文化・芸術史研究の現在と未来

報 告：今回は発表報告という形を取らず、責任者が提案するテーマに関して参加者によるラウンドテーブル・ディスカッションを行いたいと思います。

この分科会では、文化研究や芸術史のみならず、メディア文化研究や表象文化論といった新しい分野で研究を進めている若い研究者の受け皿づくりをしていきたいと考えています。前回の分科会では、表現メディアの多様化や美術館及びマーケットの変貌、あるいはポストモダニズムの常識化による「アート概念の変容」をテーマにして、3 名の若手研究者による報告を行っていただきました。今回の分科会では、この分野における若手研究者のネットワークづくりに主眼を置き、「アメリカ文化・芸術史研究の現在と未来」と題して参加者によるラウンドテーブル・ディスカッションを行いたいと思います。日本のアメリカ研究における当分野の現状に関する基調報告は責任者の方で務めます。

#### 新入会員

|                  |                              |       |
|------------------|------------------------------|-------|
| 太田美幸             | 関西学院大学                       | 史 女 教 |
| 小山内 大            | 東京電機大学                       | 言 教 日 |
| 小野加奈子            | 神戸女学院大学                      | 教 女 史 |
| 加藤恵理             | 東京大学                         | 史 米 環 |
| 加藤有佳織            | 慶応義塾大学                       | 文 米 カ |
| 久保浩樹             | 京都大学                         | 外 政 日 |
| 小島尚人             | 東京大学                         | 文     |
| 小林久美子            | 日本学術振興会特別研究員                 | 文     |
| 今野裕子             | Univ. of Southern California | 史 日   |
| 佐藤雅哉             | 一橋大学                         | 史 女 社 |
| 竹内理矢             | 立教大学                         | 文 芸 米 |
| 西牟田祐二            | 京都大学                         | 経 史 外 |
| 長谷川詩織            | 筑波大学                         | 米 民 衆 |
| 古屋耕平             | Texas A&M University         | 文 思 史 |
| 三宅禎子             | 岩手県立大学                       | 女 言 ラ |
| 村田奈々子            | 東京大学                         | 史 米 衆 |
| 山下壮起             | 同志社大学                        | 宗 衆 史 |
| 横山雅彦             | 東進ハイスクール                     | 言 思 米 |
| 吉岡宏祐             | 東北大学                         | 民 教 思 |
| Wang, John S. H. | 台湾規範大学                       | 史 民   |

#### 編 集 後 記

3 月 11 日、東日本で大地震が起きました。被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げますとともに、一刻も早い被災地での日常生活の回復をお祈りいたします。被害の実態は想像を遙かに超え、加えて、福島第一原発制御困難のニュースが世界を震撼させています。安全で、便利

で、豊かな「日常」がデリケートなバランスのうえに成り立っていること、そして、ローカルな安定が地球規模のネットワークに密接につながり合っていることを感じさせられつつ、アメリカ研究の意味をあらためて問うています。

(S.M.)

2011 年 4 月 15 日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科附属

アメリカ太平洋地域研究センター気付

Tel & Fax (03) 5454-6163

http://www.jaas.gr.jp

発行人 紀 平 英 作

編集人 中 條 猷

印刷所 啓文堂松本印刷

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12